

A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

34

フォースター

天使も踏むを恐れ
ハワーズ・エンド

荒 正人訳
小 池 滋訳

中央公論社

ブルトン

アラゴン

訳者 清水 徹
三輪 秀彦

LA MISE À MORT

by Aragon

Originally copyrighted by Librairie
Gallimard, Paris.

The Japanese edition copyrighted by Chuo-
koron-sha Inc., arranged through the Bureau
des Copyrights Français.

昭和46年9月25日初版印刷

昭和46年10月5日初版発行

発行者 山 越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ブルトン

ナ
ジ
ヤ

アラゴン

死刑執行

解説

年譜

3

103

500

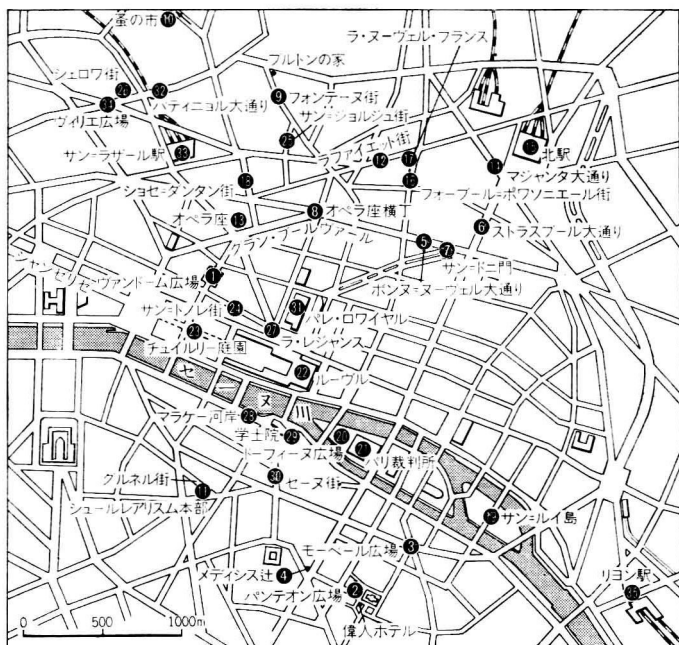
522

ナ

ジ

ヤ

『ナジャ』のパリ市街図



ぼくはだれなのか？ そう考えてだれのあとを追いかけているのだろうか？ そういえば「きみがだれと付き合っているか言ってみたまえ、きみがだれであるか言い当てよう」という諺がある、だからぼくとしては例外的に、かりにこの諺の指示に従うとすると、——そうだ、結局のところ、ぼくがだれと《付き合っている》かを知れば疑問は解決するということになるはずではないか？ だがここでぼくは認めざるをえないのだが、この《付き合う》《憑きまとう》という言葉でぼくは道に迷ってしまふ、この言葉が、「古城に幽霊が出る」とか「眠りに憑きまとう妄想」というふうにも使われるため、この言葉を用いると、ある人びととぼくとのあいだに、ぼくの考えていたよりずっと特異で、はるかに避けがたく、気持が動揺せずにはいられぬ関係が打ち立てられてしまう傾きがあるのだ。この言葉はその意味するよりずっと多くを語る、ぼくに生きながら幽霊の役を演じさせる、この言葉から明らかに暗示されるもの——それであることを止めたあとでなければ、ぼくは、ぼくであるだれか、ぼ

くの追いかけるだれかとなることはできないのだ。このような意味に考えてみると、——それはこじつけとは言えない——この言葉からぼくに解^わつてくるのは、ぼくが自分の存在の客観的な現われ、多少とも意図的な現われと思っているものが、じつは、ぼく自身にもその真の領域のまだまったく知られていないある活動の一部分、そういう活動のうちの、この生の範囲内で現われ、うつろいゆく部分にすぎないということである。《幽霊》をその常套的なたちで、つまり外見においても、なんら必然性をもたぬあるいくつかの時刻や場所に盲目的に隸属して出現するという点にも示されるその常套的なありかたにおいて、ぼくが想い描くとき、その姿は、ぼくにとつてはまずなによりも、永遠につづくかもしれぬ責め苦の、申し分のない具象化として価値がある。もしかしたらぼくの生にしてもその種のイメージにすぎないのかもしれない、そしてこのぼくは、じつは後もどりをしていないに自分では道を先へと切り開いているつもりになっていた、認識しようとするもの、じつはすでに見知っていてすぐにそれと解るはずのものであったり、習い覚えていることがじつは忘れたことのごくわずかな一部分にすぎなかったり、——そんなふうに定められているのかもしれないのだ。ぼく自身に関するこのような見方は、ぼくには誤っているとは思えない。誤っている

とすれば、それはただ、こうした見方がいまのぼく自身に先行するべくを想定している場合、（時間と妥協する理由など、ぼくの思考にはいささかもないのに）ぼくの思考の完成された姿を先の世という時間次元に恣意的にも位置づけてしまふ場合、また、取り返しのつかぬ破滅とか、贖罪とか、失墜とかの、議論の余地もないほど精神上の根拠を欠いているとぼくには思える觀念が、この見方のために、先の世という時間のなかに含まれてしまふ場合だけだ。肝腎なのは、ぼくがこの世でみずからのうちに、いくつかの個人的素質をすこしずつ発見してゆくあいだにも、その個人的素質にはいささかも心をそられずに、じつはぼく自身のものなのにぼくにはあたえられていない、ある普遍的素質をみずから求めつつけてゆくということなのだ。ぼくは自分のなかにさまざまな好みを認め、さまざまな類縁を感じる、いろいろな魅力に惹きよせられ、またいろいろな事件がぼくの身の上に起こる、いやぼくの身の上だけに起こる、ぼくは自分が多くの動きをなすのを眺め、多くの感動をただ自分ひとりで味わう、——だがそうした一切を越えて、ぼくは知らうと努めるのだ、他人との関係で、ぼく自身を区別するべくの相違性とは、いったいどういふところに在るか、ということ。その相違性がなにもとづくのかを知りたい、とまでは言わぬ。この区別をどこまで自覚す

るか、その度合に正確に対応して、ぼくは、他にも多くの人びとがいるのにとくにこのぼくがこの世にやって来たのはいったいなにをするためか、どんな唯一無二の伝言を託された使者として、その使命を自己の責任においてのみ全うしうるか、それを、ぼく自身に明かすことができるのではないだろうか？

このような省察から出発するからこそ、ぼくが望ましいと思うのは、批評が、そのもっとも親しい特権をたしかに放棄することにはなるにしても、諸觀念のまったく機械的な組み直しほどは無意味でない目標を結局みずからに掲げ、批評にもっとも禁じられていると思ひこんでいる領域、つまり、作品の外にある領域で、そこでは作者の人となり、日常生活の瑣事にとらえられて、それだけがまったく独立して表現され、その作者と他とがしばしばじつに明瞭に区別される、——そういう領域のかへと巧妙に侵入することだけをめざすというありかただ。たとえばこんな逸話を想起しよう。ユゴーは生涯の終りのころ、ジュリエット・ドルーエとつれだって、千度目にもなろうという同じ道筋の散策に出かけては、大小ふたつの門のある地所のまえに馬車がさしかかると、かならずそのときだけ、静かな瞑想をふと中断して、「車馬用門だよ、きみ」と言いながらジュリエットに大きい

ほうの門を指さし、それに答えて彼女が小さいほうの門を示しながら、「徒歩用門ですわ、あなた」と言うのを聞いている、それからすこし行って、二本の樹が枝をからみあわせている前まで来ると、こんどはジュリエットの答はないということを知りながら、また口を開いて「ビレモンとパウキスだ」と言う、——この胸を打つ儀式が何年ものあいだ毎日繰り返されたという確証がぼくらにあたえられているというのに、どうして、ユゴーの作品に関する能うかぎり優れた研究ですら、彼が何者であったか、また彼が詩人としていかなるものであるかを、この逸話ほどよく理解させ、みごとに感じとらせてくれないのであろう？ あのとふたつの門は、いわば、彼の強さと弱さを映すふたつの鏡なのである、どちらが彼の卑小さを映し、どちらが彼の偉大さを映すかは解らないが、そして、いかに偉大な天才であろうと、ジュリエットの応答のなかに完全に含まれているような魅力にあふれた修正、愛の修正を、自分の傍らにはべらせていなかったとしたら、ぼくらにとって何になるだろう？ ユゴーの作品の、もっとも精妙でもっとも熱心な注釈者さえ、ここに示された至上の均衡感に匹敵するほどのものは、なにひとつぼくに頷かちもたせてはくれないだろう。自分の尊敬する人物の一人ひとりについて、このような質の私的資料を手に入れることができたなら、ぼくはどれほど

うれしく思うことか。それが手に入らなくて、もっと値打ちがすくなく、感情的見地からすればそれだけでは充分とは言えぬ資料でも、ぼくは満足を感じることができるよう。ぼくはフローベールにかならずしも敬意を抱くものではないが、それでも、彼自身の告白によれば、彼は『サランボー』を書くにあたってはただ「黄色の印象をあたえ」ようとだけのぞみ、『ボヴァリー夫人』のときは「われら虫のうようよしている片隅の、あの黴の色のような感じを出し」たいとだけ願っていて、それ以外はすべてどうでもよいことだったのだ、そんなことを断言するひとがあると、こうした結局は文学外の関心のありかたでも、ぼくには無関係どころではなくなるのだ。クールベの絵の壮麗な輝きとは、ぼくにとっては、記念門柱が倒れたときのヴァンドーム広場の輝きのことにほかならない。現代では、たとえばキリコのような人物が、かつて何に動かされたのか、その可能ながぎりの多くを、もっともつまらぬ部分にも、こちらをもっとも不安に迫いこむような部分にも立ち入って、ことごとく、もちろん芸術家ぶった粉飾など施さずに打ち明けることに同意してくれれば、彼についての注釈をどれほど前進させることだろう！ 彼の協力なくしては、いや、現在の彼に逆らって、あのころの彼の画面と、ぼくの手もとにある一冊の自筆ノートだけが頼りでは、一九一七年まで彼の

ものであったあの世界の再構成など、まったく不完全にしかできず、とても問題にならぬだろう。じつに残念なことに、この欠落を埋めることはできないし、このような世界のなかで、事物の自然な秩序に反して事物の新たな階梯^{かたて}を打ち立てているものすべてを、充分に捉^{とら}えることはできないのだ。あのころキリコは、自分はあるいくつかの物体配置に驚かされた（まずなによりも驚かされた）場合にしか絵を描けない、啓示の謎^{なぞ}は自分にとってすべて「驚かされた」というこの語のなかにあると認めたことがある。たしかに、驚きの結果として生まれた作品は「その誕生を触発したものと密接に結びついた」ままではあるが、しかしそのふたつが似ているといっても、単に「兄弟がたがいに似ているような、あるいはむしろ、夢のなかのある特定の人物のイメージと現実のそのひととが似通っているような、奇妙な具合においてでしかなかった。このふたりは同じ人物であり、同時に、同じ人物ではなく、その顔立ちには、ある微^かかな、しかし神秘的な変容が認められるのである」。キリコにとつては、眼を打たんばかりに明白なものと思えたあの物体配置よりも、まず、そうした物体そのものに批評家的な注意を集中し、これほどにわずかな数の物体だけが、なぜこんなふうに配置される定めとなったかを探ってみる必要があるだろう。朝鮮あざみや、手袋や、ビスケッ

や、糸巻などについての、彼のもっとも主観的な見方を説明しないかぎりは、キリコについてなにひとつ語ったことにはならぬ。このような問題について、どうして彼の協力を期待しないでいられよう！ ぼくに關するかぎり、精神があるいくつかの事物配置に出会うことよりもあるいくつかの事物に対する精神の配置、つまりそういう事物を進んで理解しようと身構えている精神の姿勢のほうが、はるかに重要だと思えるのだが、とにかくこうした二種類の配置は、それだけで、感受性のあらゆる形態を支配するものなのである。こんなわけで、自分の眼のまえに提示されてくる一切のものを鑑定し、絶望への偏執に憑^つかれて存在するもののなかから選^えびだすやり方という点で、ぼくには自分とユイスマンスとのあいだに『停泊』や『彼方^{かなた}』のユイスマンスとのあいだにじつに共通するところがいろいろと見出せるので、残念ながら作品を通じてしか彼を知ることができなかったとはいえない。彼は多くの友人たちのうちでもっとも異和感のすくない人物だと言えるかもしれない。だがまた彼は、外見こそ脆弱^{ぜいじやく}とはいえないなにかにつけてぼくらの助けになるあの環と、共謀してぼくらを真逆様に突き落とすさまざまな力の、あの眼も眩^{くら}むばかりの集合体とのあいだの、必須^{ひつと}の、それなくしては生きてゆけぬような区別を、その極限へと導くために、他のだれよりも多くをなしたのでは

なかったか？ 彼は、ほとんどなにを眺めても彼に惹き起こされたあの戦くばかりの倦怠を、ぼくに頒ちあたえてくれた。さまざまな可能性を意識したため荒廃した土地の上での、無意志的なものの大いなる覚醒にぼくを立ち会わせてくれた、とまでは言わずとも、すくなくとも、そうした覚醒の絶対的な不可避性と、またその土地にぼく自身にとっての逃げ道を求めることの無効とを、人間としてぼくに納得させることのできたひとは、彼以前にはだれひとりなかったのだ。ぼくは彼にどれほど感謝していることだろう！——最悪の窮境に陥ったときでさえ、彼は、窮境の外にあって自分に関わってくる一切のもの、自分の心を占めてしまうものについて、それがどんな印象を産むかなど気にもかけずにぼくに伝えてくれたし、あまたの詩人たちのようにその窮境を《歌う》などと愚かな真似はせず、しかも、彼がこの世に生き、さらには、だれのためかは知らねど彼が語る者であるのはいったいなにゆえかということの、まったく意図せざるごくささやかなその理由を、そんな状態にあってなおみずからに見出し、忍耐がよく、ひそかに、ぼくに列挙してくれたのだから。また、外部から訪れてくるように思えるあの絶えざる誘いかけ、しかも、性質は多少とも新奇ではあるにせよ、ぼくらが心によく問いかけてみれば自分自身の内部にその秘密が見出せるようなあの偶然

の排列のまえて、しばしばくらを立ちすくませてしまうあの絶えざる誘いかけ、——彼もまたそうした力のひとつに身をゆだねた人間なのである。小説の経験主義者どもから、ぼくが彼をどれほど区別しているか、はたして言い添える必要があるうか、——あの連中ときたら、自分とはちがう人物を登場させ、思い思いの流儀で、作中人物を肉体的にも精神的にもくつきりと浮かび上がらせるのだと称しているのだが、いったいなにを弁護したくてそんな体裁のいいことを口にするのか、いや、知らないほうがましというものだ。連中は自分ではいささか見抜いたつもりになっている実在の一人物から、自分のお話のための人物をふたりでっちあげたり、ふたりの実在の人物から、別に骨も折らずにひとりの作中人物をこしらえあげたりする。そして、わざわざ骨を折るといえば、小説論の議論ばかりという始末！ ぼくの知り合いのある作家に向かい、刊行間際のその著作に関して、女主人公のモデルがあまりにも見抜かれやすいから、ここまですべてある以上はさらにせめて髪の色を変えたらどうかと提案したひとがあった。つまり金髪にしておいたら、モデルは褐色の髪の女だという秘密がもれずにすみそうだというわけである。さて、いかにもぼくはこれを幼稚だとは思わぬ、あきればたことだと思ふのだ。ぼくはあくまで実名を要求する、扉のように開け放してあって、

扉を開けるための鍵を探する必要などない書物にしか関心をもちたくない。じつに幸いなことに、ロマネスクな筋立ての心理的文学は、もはや余命いくばくもない。ぼくの確信するところによれば、この種の文学は、再起不能なほどの打撃を、ユイスマンスから受けたのだ。ぼくとしては、これからもずっとガラス張りの家に住みつづけよう、そこではだれが訪ねてきているかいつでも見透せるし、天井や壁に吊るされたものがすべてまるで魔法にかかったように宙に浮いている、そのなかで夜になるとぼくはガラスの寝台にガラスのシーツを敷いてやすむ、そうすればぼくがだれであるかが、遅かれ早かれ、ダイヤモンドで刻まれてぼく自身に見えてくるだろう。たしかに、同じ問題にまたもどって言えば、ロートレアモンが作品の背後に完全に姿を消してしまっていることほど、ぼくを脱帽させた事実はないし、彼の恐るべき「癖、癖、癖、など、など」という言葉もつねにぼくの念頭をはなれない。しかしぼくにとつては、これほど完璧な人間の消失という事態には、なにか超自然的なところがやっばり残ってしまうのだ。そんな消失を渴望したところで、それこそあまりにむだだろうし、なにか下心があるってそのような野望の背後に身をひそめる人びとの場合は、野望は、不名誉以外のなものも証しはしないものだとは、ぼくには容易に納得できるところなのである。

トリストラン・ツアラ氏としては、『髭のはえた心臓』のバリ上演の夜、ぼくら、つまりポール・エリュアールとぼくを警官に《引き渡した》ことを、おそらくひとに知られたくはないだろうが、じつはこの種の自発的行動にはじつに意味深いものがあり、歴史の光とならざるをえないこのような光に照らしてみれば、『詩二十五篇』（彼の一著書の標題である）は『警察官苦心作二十五篇』と化してしまうのである。

これからはじめる物語の余白に、ぼくは、自分の生活におけるとくに目立った挿話だけを書き記しておきたい、だがぼくの生活といっても、生活の有機的な面の外側に、ひろがつていると考えられるようなぼくの生活、言いかえれば、ぼくの生活が、さまざまの偶然に、最小の偶然にも最大の偶然にも、委ねられ、あるいはまた、ぼく的生活がぼくの意識の支配力から一時的にはなれて、ほとんど禁じられていると言ってもいい世界——突然の接近、啞然とするばかりの暗合、各人に固有の反射作用、いわばピアノで力一杯たたき鳴らした和音のような調和、なにかを見せてくれるような稲妻、いや、もしかりに普通の稲妻ほど迅速に走らぬことがあれば、そのときこそなにかをはっきりと見抜かせてくれるような稲妻、等々からなる世界——のなかへとぼくを導き入れてくれる、そのかぎりのものとしての、ぼく的生活を言うのである。

こうしたぼくの生活におけるとくに目立つた挿話とは、どんな内在的価値をそなえているのかほとんど検証できぬような諸事実を指すのだが、またそれは絶対的に予測不能で激しく偶発的な性質をもち、なにやら怪しげな觀念連合をよびますために、いわば、野にかかる蜘蛛の糸から（もしかりに、片隅やそのあたりに蜘蛛がいないとしても）蜘蛛の巣へと、つまりこの世でもっともきらめき、もっとも優美なものへとひとをいたらせてくれる方法となってくれる諸事実なのである。それは、たんに確認するというだけのものであるかもしれないが、生起するたびごとに、あらゆる面から見ていかにもなにかを伝える信号めいた外觀を呈し、しかもどんな信号であるかは判然としないような諸事実であり、そのためぼくがまったくひとりであるときにさえ、自分がいろいろなものと信じがたい默契に結ばれているという感じを味わわせてくれるもの、つまり、ぼくがひとりきりで舵をとって航海をつづけているように思えることがときにあつても、それがぼくの迷妄（まいご）にすぎないのだと思ひ知らしてくれるもの、そんな諸事実なのである。これらの事実を、もっとも単純なものからもっとも複雑なものへと、段階的に秩序づける必要があるだろう、—— なにか非常に珍しいものを見たり、どこかの場所に到着したとき、ぼくらにとってなにか重大で本質的なものがいま起ころうと

しているのだというきわめて明瞭（めいりょう）な感覚を伴いながら、ぼくらに喚起されてくる名状しがたい特殊な感動にはじまって、ぼくらの理解をはるかに越え、しかも多くの場合生存本能にでも訴えないかぎりにはぼくらが理性的活動にもどることを許してくれないような、ある種の状況の連鎖、符合から味わわれる、自己との和合の完全な喪失にいたるまで。前者の斜面型の事実と後者の絶壁型の事実とのあいだに、多くの中間項を立てることができだろう。どうあがいても自分自身に関することでありながら自分が未経験の目撃者にしかなれぬ一方の事実から、一部始終をまず充分に知りつくしているといふ思いこみがちな他方の事実までの距離は、ある事実を観察した上で書かれたいわゆる《シュールレアリスムの》な文章やテキストの構成要素となるひとつの断定ないしは断定の集合から、同じ事実を観察した上で一語一語入念な熟考と吟味を重ねて書かれた文章やテキストが全体として同じその作者に示す断定ないしは断定の集合までの距離と、おそらく等しいにちがいない。前者の場合、作者としての責任はいわば問題にならないと彼自身には思えるが、後者の場合はそれが問われている。それに反して作者のほうにしてみれば、後者の場合に生ずるものよりも、前者の場合に生ずるものに、はるかに驚かされ、はるかに魅了される。彼はまた、前者のほうをずっと誇りに思い、



図1 パンテオン広場の偉人ホテルを出発点として…… (13ページ)

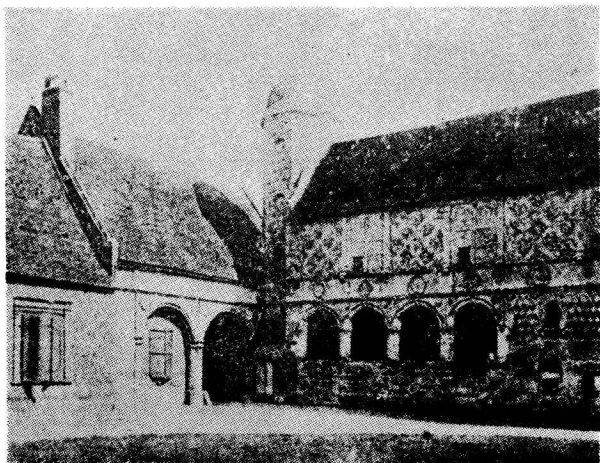


図2 ヴァランジュヴィル＝シュル＝メールのアンゴ館 (13ページ)

奇妙なことに、そのほうが自分はずっとはなれて自由であると思うのだ。さきに述べたあの選ばれた感覚についても同様であり、この感覚のうちの伝達不能な部分こそが、たぐいえない悦びの源泉となるのである。

このような領域で体験することを得た事柄について、ぼくが正確な報告をするなどと期待しないでほしい。ここではただ、ぼくの側での行動といささかの対応関係ももたずに、ときおりぼくの身に起こった出来事、思いもよらぬ方向から起こって、ぼく個人にかかわる恩寵と失寵を推し量らせてくれた出来事を、特別に努力もしないで想い出すだけにしておきたいのだ。まえもって順序を立てることなどせず、そのときそのときの気まぐれに従って記憶の表面に自然に浮かび上がってくるものだけを語ってゆくことにしよう。まず一九一八年ごろぼくの住んでいたパンテオン広場の偉人ホテルを出発点として、一九二七年夏のいま、かつてと同じく断乎としてぼくが居を構えているヴァランジュヴィル＝シュル＝メールのアンゴ館にまで進むことにしよう。このアンゴ館というのは、できればだれにも邪魔されずになりたいと思うようなときは、そこにある、林のはずれの、生い繁った藪を利用してひと目を避けた小屋に住んだらという申し出のあったところで、そこにいるとぼくは自分の好きなように仕事に没頭しながら、一方では驚みずくを使って狩



図3 たとえばいまぼくが、パリのモーベール広場にあるエチエンヌ・ドレの銅像を見るたびに、いつでも惹きつけられ、同時にまた耐えがたい不快感を惹き起こされたと言ってみても……（15ページ）